

## 被服行動に関する社会規範測定の試み\*

佐々木 薫\*\*

### 問 題

服装は着用者の自発的な選択による自己表現である側面と、着用者の性別、年齢、職業などの属性と着用の場面とに応じて社会的規制を受ける側面とを併せもっている。被服心理学（例えば、Horn, 1968; Horn & Gurel, 1981; 神山, 1985など）では「人が被服を選択ないし購買し、着用ないし消費することに含まれるすべての行動」を被服行動と呼んでいるから、この社会的規制は人々の被服行動に関する社会規範の形で存在し作用する。本稿は、被服行動に関するそのような社会規範のある種のものについて、その定量的測定を試みたものである。

筆者はこれまで比較的輪郭のはっきりした集団、例えば職場集団、学級集団、課外活動集団などに見られる**集団規範**の測定にJacksonのリターン・ポテンシャル・モデルを適用し（佐々木, 1963）、モデルの拡充をはかってきた（佐々木, 1982; 2000）。しかし、今回の研究は、これまでのような個別の集団を超えた、より広範な人々の集合に内在する**社会規範**を研究の対象にしている。

個別の集団を超えた人々の集合に見られる社会規範を測定するのにリターン・ポテンシャル・モデルを用いた例が西山(1966と1967)に見られる。まず西山(1966)は、歩行者群、バス・タクシー

運転者群、警察官群、違反運転者群の4群を対象に「警察官としてのあなたが無灯火の自転車を発見した場合」を想定させ、厳しさの異なる5通りの処置が仲間たちからどのように是認または否認されるであろうかを4段階評価させ、リターン・ポテンシャル曲線を描いて規範の構造特性を分析している<sup>1)</sup>。結果の示すところでは、バス・タクシーの運転者群が相対的に厳しい処置を是認し、違反運転者群が相対的に寛大な処置を是認していた。次いで西山(1967)は「無灯火の自転車」に乗っていた者が、「自分のよく知っている人」であったとしたら、という想定のもとで回答を求め、バス・タクシー運転者群が一転して最も寛大な処置（見て見ぬふりをして注意しない）を最も高く是認していたことを見出している。これらの研究で調査の対象となった各「群」は、明らかに個別の集団を超えた、「社会的カテゴリー」とでも称すべき人々の集合である。それでは、西山が実際用いた方法によってそれらの社会的カテゴリーのもつ規範が測られたと言えるであろうか。質問紙において「仲間たち」からの是認・否認を予想させられた時、回答者はどういう仲間を念頭に置いたであろうか。バス・タクシー運転手群や警察官群が同業者仲間を思い浮かべていたであろうことは十分想像されるが、歩行者群や違反運転者群が歩行者群という集合や違反運転者群という集合を念頭に置いていたとは思えない。例えば、違反運転者群の人たちが「あなたの仲間たち」と

\*キーワード：被服行動、社会規範、リターン・ポテンシャル・モデル

\*\*関西学院大学社会学部教授

本研究の資料は、筆者の指導の下に作成された次の卒業論文から得ている。記して謝意を表する。

大槻（旧姓、善本）宏子「被服行動に関する社会規範の研究」関西学院大学社会学部 昭和56年度卒業論文  
なお、本稿の骨子は日本繊維機械学会被服心理学研究分科会夏季集中研修会（1982年8月5日）において発表した。

1) 西山は「仲間たち」の反応のほか、「警察側上司」の反応についても予想させており、さらに「警察官としてのあなたが、信号無視の自動車を発見した場合」（場面2）についても回答を求めている。

言われて思い浮かべた人々の中には、違反運転者でない人々が無視できない数含まれていたに違いない。このように考えていくと、回答者の属する社会的カテゴリーと当該規範が適用される人々の範囲という意味での社会的カテゴリーとさらには是認・否認の出所たる人々の集合とをひとまず分けて捉えた上で、それらの対応関係を整理してみる必要があることに気付く。例えば、集団規範の場合には3者が重なっている。ある集団の成員たちを適用範囲とする集団規範では、それにかかわる行動に対する是認・否認の出所は言うまでもなく当該集団であるから、調査に最もふさわしい回答者は当該集団の成員たちということになる。しかし、ある社会的カテゴリーに含まれる人々に適用される社会規範については是認・否認の出所が必ずそのカテゴリーに含まれる人々の集合にあると断言できるほど視界は明瞭ではない。当該カテゴリーの人々に彼らの私見を尋ねることはできるが、規範を訊くときには是認・否認の出所をどこに置いて質問すべきかは充分注意する必要がある。

このような問題は、本研究でわれわれが測定しようとしている服装に関する社会規範の場合にはどうなるであろうか。一般に服装の規範が適用される範囲に関しては、性別、年齢、職業などに基づいて「社会的カテゴリー」が区分されるであろう。われわれの調査では、回答者を大学または専門学校に籍を置くほぼ同年齢の女子から選び、規範がかかわる服装をこの年齢の女性が着用するものに限定している。このことによって、是認・否認の出所として言及される「あなたの友人たち」もおのずと性別、年齢、職業に関して同じ「社会的カテゴリー」に属していることになる。つまり、ここでは規範適用の範囲と是認・否認の出所とが重なっているケースとして取り扱っているのも、西山の研究が抱えているような難点からは免れていると思われる。

要するに、本研究は、大学の女子学生およびこれとほぼ同年齢の専門学校女子生徒たちの服装に関する社会規範の一面(フォーマルさの側面)を、質問紙調査に対する彼女たちの回答を通して多少とも定量的に測定することを目指しながら、これまで**集団規範**の測定に有効であったリターン・ポ

テンシャル・モデルを**社会規範**の測定に準用する可能性と、その際に生じる諸問題について検討を加えようとするものである。

## 方 法

### 予備調査

服装に関する規範はどのような服装をどのような場面で着用するかに係わっている。そのために2つの予備調査が行われた。服装を表現するスタイル画の選定(予備調査1)と、着用の適否が問題になる「場面」の選定(予備調査2)とである。順を追って説明しよう。

**スタイル画(服装)の選定**: まず複数のスタイルブック(葩島, 1980a, 1980b, 1981)より、35種のスタイル画を選び出した。選出に当たっては次の諸点に留意した。①フォーマルと思われるものからインフォーマルと思われるものまで、できるだけ広範囲をカバーすること、②型においてできる限り多種にわたっていること(例えば、ワンピース、ツーピース、スカート、ジーパン、ベスト、ブルゾンなど)、③季節を考慮に入れないので、すべて長袖のものとする、④色や生地の種類は無視して、すべて線画とすることとした。

これらのスタイル線画を1つずつ4cm×8cmのカードにして合計35枚のカードを用意し、これをKa大学の女子学生20名(平均年齢20.7歳)に依頼して、「最もフォーマルな」から「最もインフォーマルな」まで等現間隔法で10段階に区分してもらった。具体的な方法は以下の通りである。

カードの幅より少し広い間隔で10区画に区切られ、左端から右へ1, 2, 3, ..., 10と記入された横長の紙(念のため、紙の左端には「最もインフォーマル」右端には「最もフォーマル」と記しておいた)を机上に貼り付けておき、よくシャッフルされた35枚のカードを評定者に手渡して、一通りよく目を通してもらい、次の教示のもとにカードを1枚1枚それぞれの区画に置いていってもらった。

「机の上の大きな紙には1から10までの区切りが書いてありますが、これは最もインフォーマルなもの(1)から最もフォーマルなもの(10)までフォーマルさの度合いを表しています。い

まお渡しした35枚のカードの1枚目から順に、そこに描かれているスタイルのフォーマルさが10段階のどこに相当するかを判断し、その区分のところに置いていって下さい。1つの段階に何枚置いても構いませんが、5.5というような半端な位置には置かないようにして下さい。各区分は1から10までの距離を等間隔に区切ったものと考えていますので、カードが1枚も置かれない区分があっても構いません。

教示の主旨理解を確認した後、35枚のカードすべてに目を通してもらい、調査を始めた。すべてのカードを並べ終えたあと、もう1度全体をよく見直し、移動すべきカードはないか確認を求め、必要な修正を終えたところで調査を終了した。

このようにしてカードが置かれた位置の段階得点を、そこに描かれたスタイルのフォーマル度得点とし、20名の評定者が与えた得点の平均と標準偏差をスタイルごとに算出した。これらの値に基づき、できるだけ評定者間の一致度が高く（標準偏差が小さい）、フォーマル度に関してできるだけ多様な（平均値が小さいものから大きいものまで広範にわたる）スタイルを揃えるという目標のもとに検討した末、最終的に、図1の5つのスタイルが選定された。

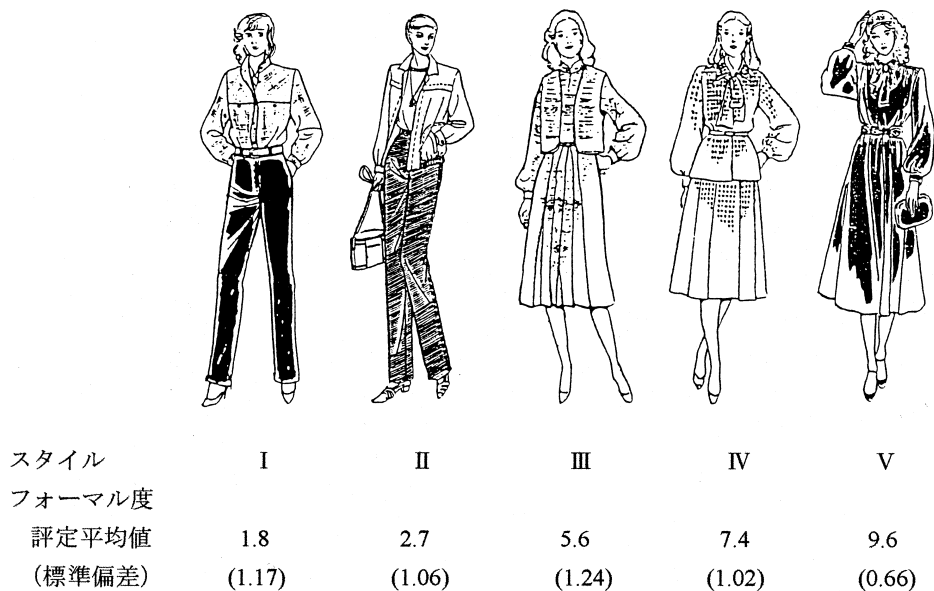
5つのスタイル間の評定値の差はできれば一定

にしたいと考えたが、標準偏差やスタイルの多様性などの条件を勘案して、この結果に落ち着いた。スタイルB（評定値2.7）がスタイルAに近くスタイルCとの間に大きな差を見せている。このことは結果の解釈において考慮されなければならない条件となろう。

**着用の場面の選定：**被服に関する社会規範というとき、どんな服を、どんな場面（いわゆる TPO）で着用するかが問題となる。同じスタイルが、ある場面では是認され、別の場面では否認されることがある。2つ目の予備調査は、これらの「着用の場面」をできるだけ幅広く収集し、それらをインフォーマル～フォーマルの次元にそって配列し、その中から意味の明瞭な（つまり、多義的な解釈を許さない）いくつかの場面を選んで、フォーマル度に関する順序尺度（できることなら、間隔尺度）を構成することであった。

具体的には、「公園を散歩する」や「結婚式に出席する」など、20個の「場面」を収集し、それらを1つずつ2cm×10cmの細長いカードに記入したものをを用いて、上とは別の評定者（Ka大学の女子学生21名：平均年齢21.2歳）に依頼して、10段階区分の等現間隔法による評定を行ってもらった。上と同様の得点変換を行い、フォーマル度の平均値と標準偏差を手掛かりにして、表1に

図1 選定されたスタイル画とそれらのフォーマル度評定値



示す9個の「場面」を選んでフォーマル度の低いものから高いものへ配列した。

評定平均値に見る通り、これら9個の「場面」はフォーマル度において必ずしも等間隔に選ばれているわけではない。平均値の高低両端に近いところでは標準偏差が小さく判断の一致が得られやすいが、中央部分では判断のバラつきが大きくなり、選定が難しくなる。ともあれ、このように配列された9つの「場面」は、間隔尺度とはなり得なかったが、順序尺度としての条件は満たしていると考えてよいであろう。

**本調査**

**回答者の構成：**本調査の回答者は、Ka 大学(共学)の女子学生47名、M 女子大学の学生59名、Ko 服装学院生67名、計175名(平均年齢20.8歳)であった。

**質問紙の構成：**質問紙は2つの部分から成っていた。第1部は服装に関する社会規範の測定を旨とした質問群であり、第2部は回答者個人の被服行動に関する価値観を測る「クリークモア被服価値観測定目録」(Creekmore, 1971; 日本繊維機械学会被服心理学研究分科会, 1980)であった。

1) 服装に関する社会規範の測定 予備調査で選ばれた5つのスタイル画を横1列に並べて印刷し(ただし、順序は図1の通りではなく、ローマ数字の代わりにアラビア数字が付されていた。付録を参照せよ)、その下に全般的な質問と回答の仕方を説明しておいて、9つの場面のそれぞれについて各スタイル画に描かれた服装(以後「服装」とのみ表記する)の着用がどれほど是認または否認されるかを問うた。その際、①もしもあなたが

(そのような)服装をしていたならば、あなたのご両親はそれをどれほど是認または否認すると思うか [(認知された) **両親の期待**]、②もしもあなたが(そのような)服装をしていたならば、あなたの友人たちはそれをどれほど是認または否認すると思うか [(認知された) **友人たちの期待=規範**]、③もしもあなたの友人の中のだれかが(そのような)服装をしていたならば、あなた自身はそれをどれほど是認または否認するか [(回答者自身の) **私的見解**] を三重に訊いた。是認一否認の程度は、1. 非常によいことだと賛成するだろう、2. よいことだと賛成するだろう、3. どちらかといえばよいことだと賛成するだろう、4. よくもわるくもないと思うだろう、5. どちらかといえばよくないことだと反対するだろう、6. よくないことだと反対するだろう、7. 大変よくないことだと反対するだろう、の7段階とし、回答者は1~7の数字のいずれかを○で囲むように求められた。具体的な質問形式は、末尾の付録に例示しておいた。

2) クリークモア被服価値観測定目録による測定 この測定目録を用いることによって、理論、経済、審美、社会、政治、宗教、感覚、探究という8つの価値指標についての得点が得られる。どの価値に強く志向しているかによって服装に関する社会規範の認知や私的見解に差異が見られるかどうかを検討するために付加された調査項目である。測定目録の構成や採点の手続きに関する詳細はCreekmore (1971) と日本繊維機械学会被服心理学研究分科会 (1980) に譲りたい。

**表1 選定された「着用の場面」とそれらのフォーマル度評定値**

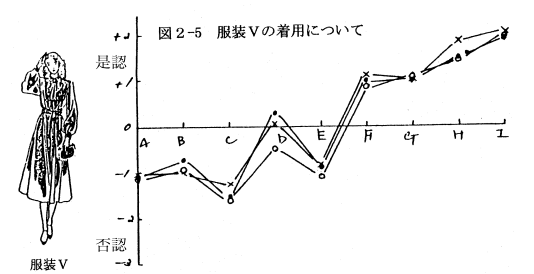
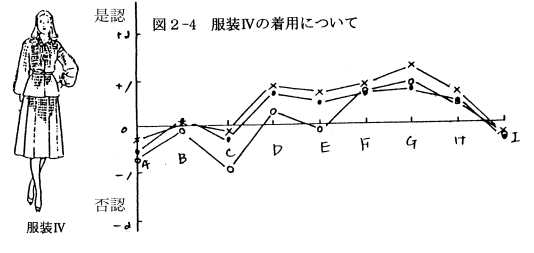
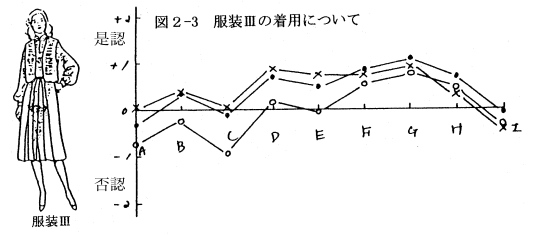
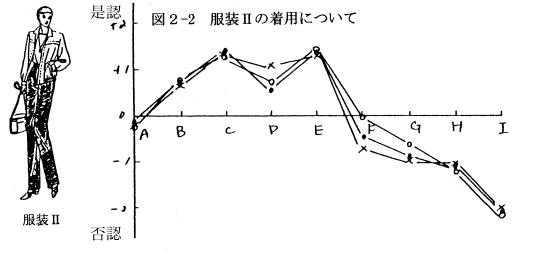
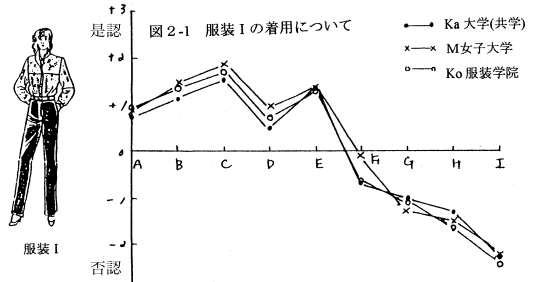
| 着用の場面               | フォーマル度 |      |
|---------------------|--------|------|
|                     | 評定平均値  | 標準偏差 |
| A. 家にいる場合           | 1.0    | 0.00 |
| B. 公園を散歩する場合        | 2.2    | 0.96 |
| C. 遊園地へあそびに行く場合     | 3.2    | 1.24 |
| D. 友人と映画を見に行く場合     | 4.0    | 1.55 |
| E. 2, 3日の小旅行に出かける場合 | 4.6    | 1.20 |
| F. 同窓会に出席する場合       | 6.8    | 1.37 |
| G. 個人的に恩師宅を訪問する場合   | 7.5    | 1.11 |
| H. 謝恩会に出席する場合       | 9.0    | 1.00 |
| I. 結婚式に出席する場合       | 9.7    | 0.64 |

## 結果と考察

**リターン・ポテンシャル曲線：**結果の提示に先立って Jackson (1960) のリターン・ポテンシャル・モデルでいうリターン・ポテンシャル曲線の描き方を説明しておかなければならない。この曲線は、横軸（行動の次元）に被服行動（ここでは、特定の場面で特定の服装をすること）を配列し、縦軸（評価の次元）にそれらの被服行動に対する評価（是認—否認）の程度を目盛ってそれを線で繋いだものである。本調査の場合、9つの場面ごとに5種の服装を着用したとき予想される「友人たち」からの是認・否認の程度を7点尺度で評定させていた。例えば、家にいる場合（場面A）に服装Iを着用していたら「あなたの友人たちはそれをよいことだと賛成するだろうと思いますか、よくないことだと反対するだろうと思いますか」（付録：Q2）と訊いて「1. 非常によいことだと賛成するだろう」から「7. 大変よくないことだと反対するだろう」まで7段階の回答肢のいずれかを○で囲ませている。この回答肢に付された数字を是認から否認に向かう評定値（近似的間隔尺度）として回答者のサンプルごとに算術平均(M)を算出する。これを  $M' = 4 - M$  で変換すると、 $M' > 0$  なら是認の、 $M' < 0$  なら否認の程度を表す数値となる。このようにして  $M'$  は服装の種類  $5 \times$  場面の数  $9 \times$  回答者のサンプル3校の数だけ算出される。これらの  $M'$  を用いて、図2-1～図2-5のようなリターン・ポテンシャル曲線を描くことができた。3本の曲線は3つのサンプルごと（つまり学校別）に、グラフの左端に示す服装で横軸上のアルファベットで表示されている9通りの場面に出向いた場合、それぞれの友人たちから与えられるであろう是認または否認の程度を表している。横軸上に配列された9つの場面は、すでに予備調査の項で指摘したように、順序尺度を構成していることに留意しなければならない。

### 1. 異なるサンプル間の比較

上述のように、図2-1～5に描かれている3本の線は回答者の3つのサンプル、すなわち、Ka 大学、M 女子大学、Ko 服装学院から得られたも



- A 家にいる場合
- B 公園を散歩する場合
- C 遊園地へあそびに行く場合
- D 友人と映画を見に行く場合
- E 二、三日小旅行に出かける場合
- F 同窓会に出席する場合
- G 個人的に恩師宅を訪ねる場合
- H 謝恩会に出席する場合
- I 結婚式に出席する場合

のである。これら3校が選ばれたのはそれぞれ男女共学の大学、女子だけの大学、服飾の専門学校という相違点に着目し、これが服装に関する規範に何らかの差異をもたらしているであろうと予想されたからである。しかし、この予想は当たったとは言い難い。服装Ⅲ（図2-3）と服装Ⅳ（図2-4）の一部にKo服装学院の特異性（つまり、服装Ⅲで家に居たり、公園を散歩したり、遊園地へ遊びに行ったり、友人と映画を観に行ったり、2,3日の小旅行に出かけたりすること、また服装Ⅳで遊園地へ遊びに行ったり、2,3日の小旅行に出かけたりすることを抑制するような傾向）がいくぶん認められるが、全体として3本の線はよく似通っている。

因みに、Ko服装学院のサンプルに見られた上記の特異性の背後にどの程度の私的見解による裏付けがあるかを5つの服装すべてについて検討したが、それらの中で最もサンプル間のズレが大きかったのが図3-aとbであった。確かに私的見解も上記の特異性に似た曲線を描いているが、他の2校から目立って異なるのは服装Ⅲ（図3-a）で場面C、服装Ⅳ（図3-b）で場面CとE、合わせて3箇所と特異な場面の数はむしろ少なくなっている。

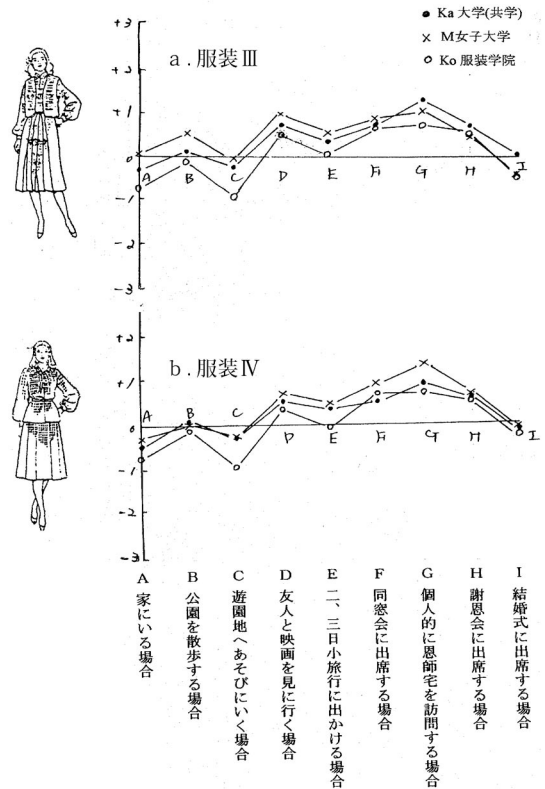
一般に都会の学生たちがそうであるように、これらの学校の学生たちも、クラブやサークル、さらには合同コンパや合同ピクニックなどを通じて、他校の学生たちとの間に多くの交流の機会もっているのであろう。

このように「あなたの友人たち」から予想される是認・否認すなわち規範が、学校という個別の集団を超えて共通している場合こそ、社会規範と呼ぶにふさわしいと言えよう。

## 2. 服装と場面との対応

図2-1によれば上記3校のサンプルが揃って服装Ⅰが許容されるとしているのは場面AからEまでであり、同様に図2-2によれば服装Ⅱが許容されるのは場面BからEまで、そして服装Ⅲ（図2-3）と服装Ⅳ（図2-4）の許容される場面はともにDとF~H（ただし、後者の方がいくぶんインフォーマルな場面での着用が否認され、フォーマルな場面での着用には是認が集中している）、そしてさらに服装Ⅴ（図2-5）の着

図3 服装ⅢおよびⅣの着用に関する私的見解 (3つのサンプル間の比較)



用許容範囲は場面F~Iとなり、しかも場面FからIへすすむほど是認が高くなっている。

このような服装と場面の対応関係は、予備調査における服装と場面の選定がいずれもインフォーマル~フォーマルの次元に沿ってなされたことから当然予想されたことである。強いてこの調査結果のメリットを挙げれば、スタイル画によって具体的に示された個々の服装が調査に取り上げられた個々の具体的場面でどのように是認あるいは否認されるであろうかを明らかにした点であろう。むしろ、われわれはここで次の2点に注目しておきたい。(1) 調査に取り上げられた5つの服装のうちフォーマル度の両極に近いものほど3サンプル間の一致度が高いこと、(2) 予備調査でのフォーマル度評定に基づいて順序尺度を構成している筈の場面であるのに、必ずしも服装のフォーマル度ときれいに対応しない場面CやEの意味

するところを考えると、フォーマル度とは別に「活動性」とでも言うべきもう1つの次元を考慮しなければならないように思われる。

### 3. 私的見解と親からの期待 (Ka大学のデータ)

次のステップの分析は、このような規範を回答者自身の「私的見解」と彼女らが認知している「親からの期待」と関連させて考察することである。その際、どの調査資料を使うかについていくつかの選択肢が存在した。先にみた通り、フォーマル度を軸にした服装に関する規範には、予想に反して3つのサンプル(形態の異なる3校)間に特徴的な差異が認められなかった。したがって、3つのサンプルを合わせて分析することが考えられる。しかし、規範に差が見られなかったということは、「私的見解」や「親からの期待」にも差異が見られないという保証にはならない。学生の育った家庭や生育歴には学校ごとに多少の偏りがあるかも知れない。そのような3校の資料を合わせてしまえば、分析結果は曖昧なものとなる懼れがあろう。どこか1校を選んでその資料だけを分析する方がより明瞭な結果を得やすいのかも知れない。それではどの学校を選ぶか。結局、今日最も一般的な男女共学の大学、すなわちKa大学の資料を取り上げることにした。

図4-1~5はKa大学の学生たちから得た資料に基づいて、上で見てきた規範の曲線に回答者自身の「私的見解」と彼女らが認知している「親からの期待」を(規範の曲線を描いたときと同様の処理を施して)曲線として描き添えたものである。

これらの図を一覧してまず目に付くのは、私的見解が規範ときわめてよく一致していることである。これは拡充されたリターン・ポテンシャル・モデル(佐々木, 1982)で言う「規範の虚構性」が極めて小さいことを示し、この規範が回答者たち自身に強く支持されていて、きわめて安定したものであることを意味する。

次に注目されるのは、「(認知された)親からの期待」が服装IとIIをフォーマルな場面(F~I)で着用することを(仲間内の規範や回答者自身の私的見解よりも)厳しく否認し、これらのフォーマルな場面では服装Vの着用を大いに是認している点である。この年齢の女性たちは、(少なくとも



服装 I



服装 II



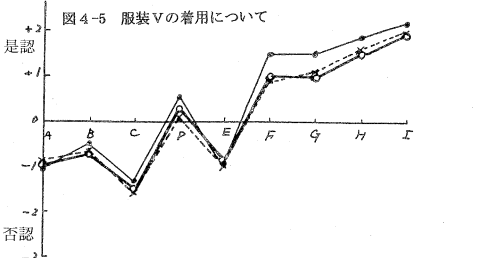
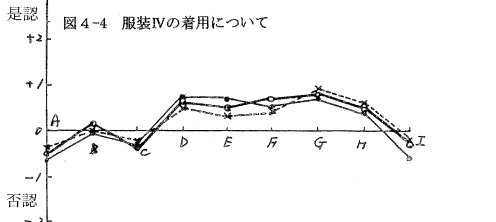
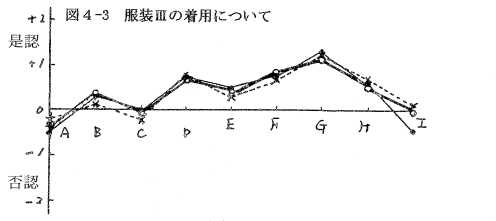
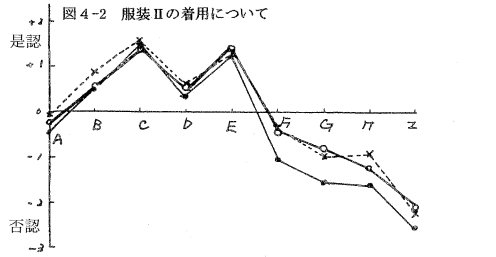
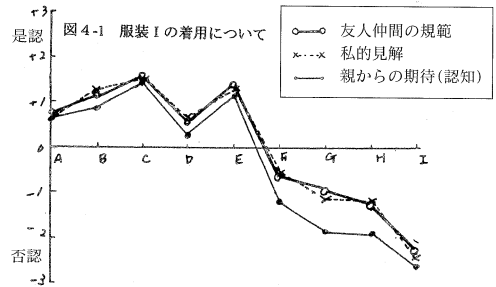
服装 III



服装 IV



服装 V



- A 家にいる場合
- B 公園を散歩する場合
- C 遊園地へあそびに行く場合
- D 友人と映画を見に行く場合
- E 二、三日小旅行に出かける場合
- F 同窓会に出席する場合
- G 個人的に恩師宅を訪問する場合
- H 謝恩会に出席する場合
- I 結婚式に出席する場合

彼女らの意識の中では) 親たちほどにはフォーマルとインフォーマルを峻別していないことが読み取れる。

4. クリークモア被服価値観と私的見解

Creekmore 被服価値観測定目録によって測られた8個の指標得点のサンプル平均は図5に見られる如く、3つのサンプル間できわめて類似していた。

また、表2は回答者を指標得点に基づいてタイプ分けしたときの人数を示している。人数の合計が最初に示した回答者数より少なくなっているのは、回収された調査票の中にこの測定目録の部分のみ無回答であったものが混じていたことと、

複数の指標に同得点があつてタイプの決定ができない者がいたためである。この表を見ると、図2の探究指標でKo学院がいくぶん高い得点を示しているかに見えていたのが必ずしも探究タイプの人数の突出した多さと結びついているわけではなく、むしろM女子大におけるこのタイプの少なさが際だって見える。しかし、この程度の分布に見られる偏りは統計的には有意でない ( $df=6$  の  $\chi^2$  検定による)。このことは、図2-3と-4で見られたKo服装学院の特異性がこの被服価値観によっては十分説明できないことを示している。

被服価値観の相違は、被服行動に関する個人の

図5 被服価値観測定目録によって測定された8指標のサンプル別平均得点

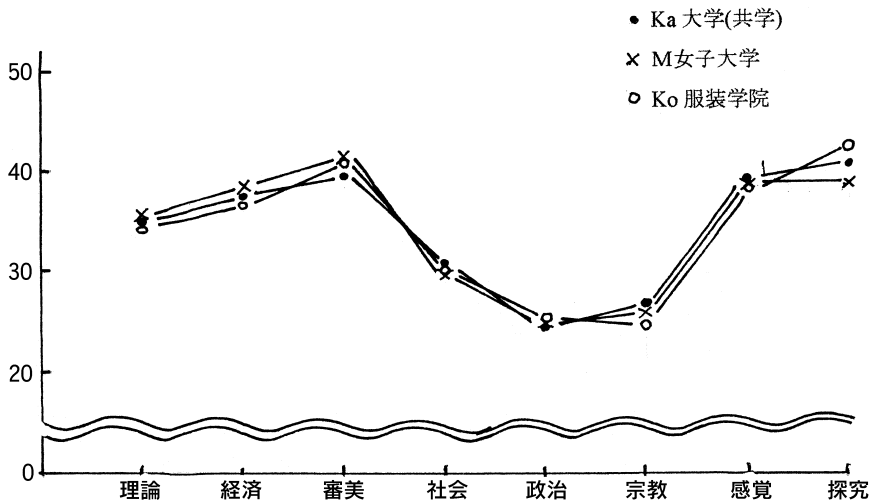


表2 被服価値観8タイプの人数分布

| 価値観のタイプ | Ka 大学     | M女子大学     | Ko 服装学院   | 計   |
|---------|-----------|-----------|-----------|-----|
| 理論      | 0( 0.0)   | 3( 5.5)   | 4( 6.1)   | 7   |
| 経済      | 6( 16.2)  | 12( 21.8) | 7( 10.6)  | 25  |
| 審美      | 8( 21.6)  | 13( 23.6) | 19( 28.8) | 40  |
| 社会      | 0( 0.0)   | 1( 1.8)   | 1( 1.5)   | 2   |
| 政治      | 1( 2.7)   | 1( 1.8)   | 0( 0.0)   | 2   |
| 宗教      | 0( 0.0)   | 0( 0.0)   | 0( 0.0)   | 0   |
| 感覚      | 9( 24.3)  | 16( 29.1) | 9( 13.6)  | 34  |
| 探究      | 13( 35.1) | 9( 16.4)  | 26( 39.4) | 48  |
| 計       | 37(100.0) | 55(100.0) | 66(100.0) | 158 |

注：( )内の数字は列の計に対する百分比。  
ゴシック体の部分の資料が図6で用いられた。



私的見解に関連するであろうか。

図6-a, b, cは、人数の多かった3つの価値観タイプ、すなわち探求タイプ (n=48)、審美タイプ (n=40)、および感覚タイプ (n=34) についてそれぞれの私的見解を比較したものである。

これらの図はこれまでのものとは異なって、グラフの横軸に服装を配列してある。この方がタイプ間の差異を読み取り易いと思われたからである。9つの場面のそれぞれについてこのような比較を行い、そのなかで相対的に大きな差異が見られた3つの場面を選んで提示したのである<sup>2)</sup>。まず図6-aは、公園を散歩する場合(場面B)の服装についての回答者自身の私的見解を各価値観タイプごとの平均値と比較したものであるが、感覚タイプは服装IからIVまでを許容しているのに、審美タイプは服装IIIまで、さらに探求タイプは服装IIまでと、次第に許容範囲を狭めている。図6-bは遊園地へ遊びに行く場合(場面C)の服装についてみたものであるが、タイプ間の差は許容範囲としては現れないものの服装III, IVの着用に対する否認の程度に探求タイプ>感覚タイプ>審美タイプという関係が見て取れる。この関係は図6-cでは同窓会に出席する場合(場面F)の服装III, IV, Vの是認の程度に探求タイプ<感覚タイプ<審美タイプという順で現れている。

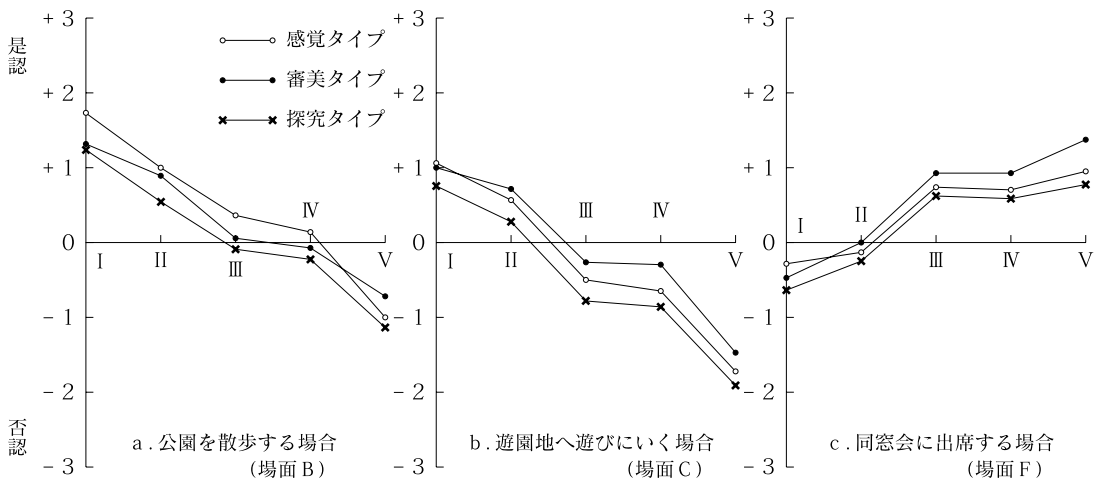
結果のまとめ

本研究の調査対象として選ばれた3つのサンプルでは、われわれの予想に反して被服価値観に差がなく、被服行動に関する規範にも明確な差異が見られなかった。サンプルの枠をはずして個人の被服価値観タイプと私的見解の関係を診たとき一部の場面でわずかな対応関係を読み取ることができたに過ぎない。これらのサンプル間でこれほどまでに似通った規範が見られたということは、少なくともフォーマル～インフォーマルの次元に沿った被服行動に関しては集団規範を越えた社会規範が存在することを示唆している。そして、そのような社会規範の測定に「拡充されたリターン・ポテンシャル・モデル」が充分利用可能である、との証左が得られたとみてよいであろう。

要 約

男女共学の大学、女子大、服飾専門学校という3つのサンプルから合計175名の回答者を得て、被服行動に関する規範を測定する質問項目とクリークモア被服価値観測定目録を含む質問紙調査を実施した。フォーマル度の異なる5種類の服装が9つの場面でのように是認あるいは否認されるかを、拡充されたリターン・ポテンシャル・モデルに基づいて分析した結果、3つのサンプル間

図6 被服価値観のタイプ別にみた私的見解



2) この部分で述べるタイプ間の差異には推測統計学的な検定を施していない。規範に直接かかわる分析ではないので労を省いた。

でよく似通ったリターン・ポテンシャル曲線が見られた。

さらに、共学の大学の資料について回答者自身の私的見解と（回答者が認知している）親からの期待とがこの規範とどのように関係しているかが検討された結果、規範と私的見解とがよく一致していること（規範の虚構性が小）、親たちはフォーマルな場面とインフォーマルな場面とを峻別した被服行動を採るよう期待していると認知されていることなどが明らかになり、拡充されたリターン・ポテンシャル・モデルがこの種の社会規範の測定に利用可能であることが検証された。

最後に、クリークモア被服価値観にもサンプル間に差異が見られなかったので、サンプルの枠をはずして審美タイプ、感覚タイプ、探求タイプの3群を構成し、私的見解に見られる差異を検討したところ、若干の場面で小さな差異が認められた。

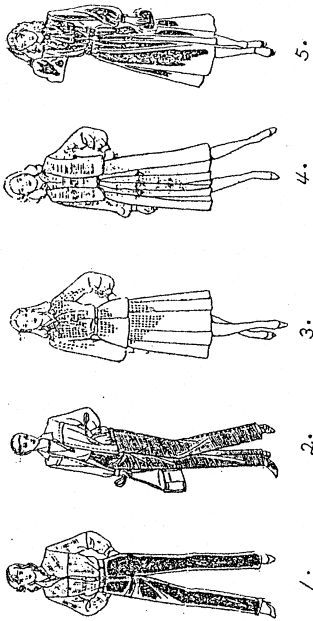
## 文 献

- Creekmore, A. M. (1971) *Method of Measuring Clothing Variables*. Michigan Agricultural Experiment Station Project No. 783, Michigan State University.
- 神山進 (1985) 「被服心理学」 光生館
- 葩島智恵子編 (1980a) 冬から春へのスタイルブック 別冊ドレスメーカー 96号 鎌倉書房
- 葩島智恵子編 (1980b) 秋のスタイルブック 別冊ドレスメーカー 90号 鎌倉書房
- 葩島智恵子編 (1981) ドレスメーカー：マダムのスタイルブック 秋冬の号 57号 鎌倉書房
- 藤原康晴 (1981) コミュニケーションとしての被服：被服の印象形成 日本繊維機械学会 Pp. 79-91.
- Horn, M. J. (1968) *The Second Skin: An interdisciplinary study of clothing*. Houghton Mifflin.
- Horn, M. J., & Gurel, L. M. (1981) *The Second Skin: An interdisciplinary study of clothing*, 3rd ed. Houghton Mifflin. 藤原康晴・杉村省吾・池本明 (訳) (1983) 「ファッションと個性：被服心理学序説」 昭和堂
- 西山啓 (1966) 交通事故防止にかんする社会心理学的研究 (1)：集団規範と個人の態度の形成について 島根大学論集 (教育科学) 第16号 Pp. 31-39.
- 西山啓 (1967) 集団規範と個人の態度の形成について (2)：交通事故防止にかんする社会心理学的研究 II 島根大学教育学部紀要 第1巻 (人文・社会科学) Pp. 13-23.
- 日本繊維機械学会被服心理学研究分科会編 (1980) 「被服に関する価値観の社会心理学的測定：実施要項、調査表」
- 佐々木薫 (1963) 集団規範の研究：概念の展開と方法的吟味 教育・社会心理学研究 4, 21-41.
- 佐々木薫 (1982) 集団規範の変化に関する研究 三隅 二不二・木下富雄 (編) 「現代社会心理学の発展 I」 ナカニシヤ出版 Pp. 151-178.
- 佐々木薫 (2000) 「集団規範の実証的研究」 関西学院大学出版会

付録：被服行動の規範などを測定するのに用いられた質問項目の例

Q1は観からの期待、Q2は規範、Q3は私的見解を測る質問項目。

場面B、...、1は各質問項目の場面表示が変わるだけで、3つの質問項目はすべて同一であったので、場面B以下は省略する。



今から9の場面を想定します。もしもその場面において、あなたが上のような服装をしたとするとするならば、あるいは他の人が上のような服装をしたとするとするならば、あなたはそれを非常によいことだと賛成するか大変よくないことだと反対するか、又、他の人はどう考えらると思うかを答えていただきます。回答は下の表をもとに7段階のうち相当するものに○を記入してください。

- もしもXを著でいくとすると、あなたは・・・
- |    |                         |
|----|-------------------------|
| 1. | 非常によいことだと賛成するだろう        |
| 2. | よいことだと賛成するだろう           |
| 3. | どちらかといえば賛成するだろう         |
| 4. | よくもわるくもないと思うだろう         |
| 5. | どちらかといえばよくないことだと反対するだろう |
| 6. | よくないことだと反対するだろう         |
| 7. | 大変よくないことだと反対するだろう       |

場面 A 家にいる場合

- Q1. もしもあなたが次のような服装をしていたならば、あなたの二面鏡はそれをよいことだと賛成するだろうと思いますか、よくないことだと反対するだろうと思いますか。
1. の服装をしていたとしたら・・・ 1-2-3-4-5-6-7
2. の服装をしていたとしたら・・・ 1-2-3-4-5-6-7
3. の服装をしていたとしたら・・・ 1-2-3-4-5-6-7
4. の服装をしていたとしたら・・・ 1-2-3-4-5-6-7
5. の服装をしていたとしたら・・・ 1-2-3-4-5-6-7
- Q2. もしもあなたが次のような服装をしていたならば、あなたの友人たちはそれをよいことだと賛成するだろうと思いますか、よくないことだと反対するだろうと思いますか。
1. の服装をしていたとしたら・・・ 1-2-3-4-5-6-7
2. の服装をしていたとしたら・・・ 1-2-3-4-5-6-7
3. の服装をしていたとしたら・・・ 1-2-3-4-5-6-7
4. の服装をしていたとしたら・・・ 1-2-3-4-5-6-7
5. の服装をしていたとしたら・・・ 1-2-3-4-5-6-7
- Q3. もしもあなたの友人の中のどれかが次のような服装をしていたとするならば、あなた自身はそれをよいことだと賛成しますかそれともよくないことだと反対しますか。
1. の服装をしていたとしたら・・・ 1-2-3-4-5-6-7
2. の服装をしていたとしたら・・・ 1-2-3-4-5-6-7
3. の服装をしていたとしたら・・・ 1-2-3-4-5-6-7
4. の服装をしていたとしたら・・・ 1-2-3-4-5-6-7
5. の服装をしていたとしたら・・・ 1-2-3-4-5-6-7

※ 右の票をよく見てみて、数字に○を記入して下さい。 ※

## An Attempt to Measure Social Norms concerning Clothing Behavior

### ABSTRACT

A questionnaire survey was administered to 175 female students from 3 samples (co-ed university, women's college, and dress-making professional school) to measure their values and norms of clothing behavior. Five out of 35 styles (dresses) and 10 out of 20 occasions were selected in pretests on the basis of ratings by the judges according to their 'formalness'. Respondents in the survey were asked to estimate their friends' approval/disapproval for each case of wearing each dress on each occasion (a norm among female students), together with an anticipated approval/disapproval from their parents (parents' expectation) and their own approval/disapproval (private position). An expanded version by the author of Jackson's Return Potential Model was utilized to analyze the data. Norms of clothing behavior of the 3 samples proved quite similar. Further analysis of one sample (co-ed university) revealed that their private positions generally coincided with the norms, and parents were seen to discriminate more severely between formal and informal occasions.

The values measured by means of a Japanese version of Creekmore's Inventory showed little difference among the 3 samples. Some minor differences were found which suggest coincidence between types of values and private positions concerning clothing behavior.

Methodologically, the Jackson's Return Potential Model expanded by the author proved applicable to the measurement of social norms.

**Key words:** clothing behavior, social norm, return potential model